

## 深沢七郎著『櫛山節考』, 原文＝フランス語訳の対照<sup>1)</sup>

高橋秀雄

### Abstract

We are engaged in considerations of the internal structure and the expressions of Japanese and French languages by comparing original texts and translated ones. This paper deals with Shichiro Fukazawa's novel *An Essay on the Narayama's Ballads* and its translation into French by Bernard Frank.

After we glanced how Philippe Pons, journalist, presented Bernard Frank, translator, in the necrology published in *Le Monde* and how B. Frank interpreted this Fukazawa's novel in the Preface to his translation, we divide the novel according to the story into 18 small parts, synthesize these 18 parts into 4 sections from a structural point of view of the work, point out some questions of translation in general and in particular from Japanese into French, and finally take out and examine 7 passages from the novel.

### 序

日本文学のフランス語への翻訳出版が盛んに行なわれているが、日本語テキストとそのフランス語訳を対照させながら読んでゆくと、日本語とフランス語それぞれの言語の構造上の特質、さらにそれぞれの言語による表現上の特質にあらためて気づかされることがある。本論は、これらの特質のいくつかを考察したこれまでの研究<sup>2)</sup>につらなるものである。

ここでは、深沢七郎の作品『櫛山節考』を日本語の原文とそのフランス語訳との対照を通して読み直し、フランス語への訳者ベルナル・フランク氏（1996年死去）のこの作品における翻訳者としての取り組みをふりかえる。

#### (1) テキストについて

扱うテキストは次の通りである。

原文テキスト：深沢七郎（1914-1987）『榎山節考』、1956。ここでは新潮文庫版（1964年初版、『榎山節考』のほかに『月のアペニン山』『東京のプリンスたち』『白鳥の死』を収録。日沼倫太郎の「解説」つき）を用いる。pp. 34-92, ほかに著者自筆楽譜2頁。

フランス語訳テキスト：Shichiro Fukazawa, *Étude à propos des chansons de Narayama*, traduit du japonais par Bernard Frank, 1959, « Folio », Gallimard. (préface, 1958 ; postface, 1979)

## (2) 訳者について

ル・モンド誌 *Le Monde*（1996年10月18日付）におけるフィリップ・ポンス Philippe Pons 記者執筆のフランク氏死亡記事によってたどる。

ベルナール・フランク (Bernard FRANK, 1927.2.28-1996.10.15) :

東洋言語文明学校で中国語と日本語を学ぶ<sup>3)</sup>。文学博士。1972年から74年まで、東京の日仏会館館長を勤める。パリ高等研究実習学校で「日本史」「日本文献学」を担当する傍ら、パリ第七大学で教鞭をとる。1979年以来、コレージュ・ド・フランス教授。

『榎山節考』『今昔物語』(*Histoires qui sont maintenant du passé*, Gallimard) を翻訳。ギメ美術館の日本・中国の仏教の名僧たちの部を組織し、その図録を執筆したが、これは見事な生涯の著作で、一種の仏教の名僧たちの辞典である。

東洋学の第一人者。日本の古典文学と宗教思想の権威であるが、難解な知を扱う学者であると同時に、民話の話し手の魅力をそなえた人であり、博物館のガラス・ケースや図書館に眠っているものとそれらの遺産が関わる現在との絆を結ぶことのできた人だった。

ベルナール・フランクの仕事は、宗教儀礼のテキストから汲み取られた知識をていねいにつぎ合わせることによって養われた。彼は日本の地方をくまなく歩いて集めたお札のコレクションをもっている。

## (3) 『榎山節考』と作者深沢七郎について

フランス語訳書の「まえがき」におけるベルナール・フランクの論を紹介する。

近代世界に入った日本では、100年来、著名な文人は大学出の、外国の文学・思想の知識をもつ文化人であった。深沢の場合は異なる。山梨県石和の生まれ。そこは、人が外部の影響を受けにくい、山の多い、険しい土地である。学歴はない。生まれつき文学を好み、谷崎に私淑した。若い頃から文を書いたが、本以上に山や農民が彼の師匠であった。それから、音楽。彼の散文には音楽のリズムがある。

その後、古典ギターを学ぶ。日劇ミュージック・ホールではたらき、丸尾長頭と出会う。

1956年11月、『榎山節考』により第1回中央公論新人賞を受賞。粗野、残酷さがある者を

動転させる一方、この作品の深い人間性、不思議な詩情、音楽的な構成を絶賛する者もある。正宗白鳥、谷崎潤一郎、伊藤整、三島由紀夫、武田泰淳等、新しい、真の文学を渴望していた人々はこの作品に注目する。

作品は、作者が集成した一連の歌を提示するという仕方で行われる。リアリズムが楽譜を付録に載せさえするほどにすすめられる。作者はこの歌を出発点として、歌が含む暗示によって社会をまるごと再構成したように見せかける。擬似学識的表題の理由はそこにある。

深沢は日本の古い地域的伝承をテーマとして、飢えに苦しむ世界を描いた。それはフランスの『親指小僧』のテーマでもある<sup>4)</sup>。深沢はこの苦しみを人間の最も根源的なものとして示している。

食糧の少ない、閉じられた世界では、社会は食糧分配について掟と倫理を設ける以外の手立てをもたない。作者はわれわれに、最初は愚かにみえる原理に基づいて作られた社会の中に最もあわれむべき醜さと同時に、最も崇高な徳も存在しうることを示している。登場人物はこの点で祖型である。深沢はわれわれ自身の価値の基礎の問題をわれわれにつきつける。詩的方法で表明された彼の批判は遠くまで行く。

この本を考えるもう一つの視点は、仏教的視点である。仏教の基本的な観念はカルマ(業)の原理である。この小説の人物の運命ほどカルマという観念に合ったものはない。おりんと又やんの二人は、それぞれ自分の運命を毎日作り上げているようにみえる。又やんはエゴイズムで、おりんは自己犠牲で、二人はそれについて完全に責任を負う。又やんは黒いカラスの群れの中に落ちる。おりんは白い蓮のような純白の雪に覆われる。これは仏教における『神曲』ともいうべき『往生要集』<sup>5)</sup>のテーマの近代世界における移しかえではないか。仏教が日本思想の源泉の一つとして生きつづけている証拠と考える。

この解釈が示されたとき作者は、カルマという概念は自分の言おうとしていることをよく表わしているが、それは自分の中では意識されていなかったと言った。この概念はごく自然に作者の精神を支配していたのだ。この思いも及ばぬ力に満ちたテキストを読んで、ある日本の友人は自分自身の最も暗い部分まで降りて行き、自分自身の神話の味をあげている感情をもったと言った。カフカがユダヤ世界に対して、またロルカがスペインに対してしたように、深沢は日本に関して深い何かを引き出したと思われる。それは生の、死の、そしてすべてが融合する自然の、きわめて古い感情である。

訳者はフランス版の読者がこの感情を、できるだけ文字通りに訳そうと心がけたこの翻訳の一字一字を通して、また著者が交響曲のように展開し・くりかえすテーマの動きの中に見出だされることを望む。

訳者は、原稿を読み貴重な御指摘を下さった渡辺一夫先生に、また早くからこの本を認め出版社に御紹介くださったロジェ・カイヨワ氏に謝意を表す。

## (4) 『榎山節考』梗概／作品構成

## 梗概

新潮文庫版, 34-92頁 (総頁数: 59頁)

1. 「山と山が連なっていて、どこまでも山ばかりである。」信州の山間の村。村はずれに、おりんの家。家の前に大きな樺の根の切り株があり、おりんの家は「根っこ」と呼ばれる。おりんは50年も前に「向う村」からここに嫁に来た。69歳。亭主は20年前に死ぬ。一人息子の辰平は、嫁が去年山に栗拾いに行つて谷に落ちて死に、やもめ。孫が4人(16歳のけさ吉を先頭に男3人と末っ子の女の子)。(p. 34, 1.1-1.9; 1頁)

2. 榎山祭りがあと一月とせまったある日、おりんは2つの声をきく。一つは祭りの歌で、「榎山祭りが三度来りゃよ 栗の種から花が咲く」というもの。この歌の解釈がなされる。3年たてば三つ年をとるという意味で、七十になると榎山まいりに行くことになっており、年寄りにその年が近づいたことを知らせる歌だという。おりんとともに辰平も歌に耳を傾ける。辰平も気にしてしてくれたと思い、おりんは胸がこみあげてくるを感じる。(p. 34, 1.10-p. 35, 1.11; 1頁)

3. おりんが待っていたもう一つの声とは、向う村に後家ができたことを知らせる飛脚の便りである。その後家は辰平と同じ45歳。辰平の再婚が予想される。村の結婚については、結婚式などという改まったことはしない、当人がその家へ遊びになど行っているうちに泊りきりになって、いつからともなくその家の人になってしまう、という仕方だという。(p. 35, 1.12-p. 37, 1.15; 2頁)

4. 「榎山には神が住んでいるのであった。」榎山祭りと盆はつづいている。陰暦7月12日が榎山祭りで、7月13日から7月16日までが盆である。榎山祭りの日は「白萩様」(白米)を炊いて夜中御馳走をたべる。榎山祭りの歌には替え歌がいろいろある。そのうちの一つ「塩屋のおとりさん運がいい 山へ行く日にゃ雪がふる」の解釈がなされる。ここでの「山へ行く」は榎山へ行くということであり、そしてそれはなるべく冬行くように、また雪の降る前に行くようにということを示している、と説明される。(p. 37, 1.16-p. 40, 1.9; 2頁半)

5. おりんは振舞酒をつくり、山に行つて坐る筵を編み、榎山へ行く準備をすでに済ませているが、もう一つ、丈夫な歯を欠くことが残っている。孫のけさ吉がよそで「おらんのおばあやん納戸の隅で 鬼の歯を三十三本揃えた」と唄って喝采を博している。これは母親を侮辱する歌(秘密のところの毛を三十三本揃えた)の替え歌である。おりんは歯の抜けたきれいな年寄りになって榎山参りに行きたいと思ひ、常々火打ち石で自分の歯を叩いている。(p. 40, 1.10-p. 43, 1.5; 3頁)

6. 村には22軒の家がある。おりんの家のとよりは「銭屋」(越後に行った時、天保銭を一枚持って帰つた)で、村一番のけちんぼ。老父の又やんはおりんと同じ年頃である。そのとよりは「焼松」(家の裏の枯れた松の大木の幹に雷が落ちた)。「焼松」のとよりは「雨屋」(昔この家の人か巽山で二つの頭のある蛇を殺してから、この家の人か巽山に行くとき雨が降ると

いう)。「雨屋」のとなりは「榎の木」(村で一番大きい榎の木がある)。「かやの木ぎんやんひきずり女 せがれ孫からねずみっ子抱いた」という歌が解釈される。極度に食糧の不足しているこの村では曾孫(ねずみっ子)を見るというのは、多産や早熟の者が三代続いたことになって嘲笑される、と。(p. 43, 1.6-p. 44, 1.16; 2頁)

7. 辰平は雨屋の亭主がおりんを侮辱する「鬼の歯」の歌を唄っているのを聞く。そしてこれを唄い出したのがけさ吉であることをはじめて知って、怒ってけさ吉を探しまわり、けさ吉を叱る。(p. 45, 1.1-p. 47, 1.9; 2頁半)

8. その晩のめし時。おりん、「向う村」から辰平に嫁が来ることをみんなに知らせる。けさ吉、自分が嫁をもらうと言って、父親が後添いを迎えることに強く反対する。けさ吉が「池の前」の松やんと結婚の約束をしていることがわかる。おりんと辰平は、けさ吉が嫁をもらう年頃になったことに気づき驚く。(p. 47, 1.10-p. 50, 1.12; 3頁)

9. 祭りの日(陰暦7月12日)。女がひとり根っこに坐っている。辰平の後妻にきた玉やんである。おりんは玉やんを家の中に招き入れご馳走を出す。うれしくなったおりん、石臼のかどに思い切り歯をぶつけ、2本の歯を折る。これで何もかも片づいたと躍り上らんばかりとなり、村の人にも見せようと、血だらけの口をあけて祭りの場にあらわれる。このことで、おりんはその後鬼婆と呼ばれるようになる。(p. 50, 1.13-p. 58, 1.8; 8頁)

10. 「榎山祭りが過ぎると、すぐ木の葉が風に舞った。」おりんの家にながまた一人ふえる。松やんが膳の前に坐るようになる。松やんはけさ吉の子をみごもっている。女が二人ふえ、おりんはひまになって、榎山まいりが唯一の目標となる。(p. 58, 1.9-p. 64, 1.2; 5頁半)

11. 夜どおし強風が吹きまくった夜明け、「榎山さんに謝るぞ」という叫び声が起る。雨屋の亭主が焼松の家に忍びこんで豆のかますを盗み出したのだ。「榎山さんに謝る」は、盗みをはたらいた者の家の食糧を奪い取ってみんなで分け合うという制裁で、村人はかならずはだして、棒をもってかけつけなければならない、と説明される。(p. 64, 1.3-p. 65, 1.17; 2頁)

12. 食糧不足のための冬を越せるかという不安と、雨屋を根絶やしにする話題。辰平はおりんに「おばあやん、来年は山へ行くかなあ」と話しかける。玉やんとけさ吉は、おりんがねずみっ子(曾孫)を抱いたと嘲笑されないように、生まれた子どもは捨てると言っておりんを慰める。それから三日目の夜、大勢の足音が乱れがちに通る。翌日、雨屋の一家が村からいなくなる。(p. 66, 1.1-p. 74, 1.12; 9頁)

13. 12月、松やんは臨月を迎える。あと4日で正月になるという日、おりんは辰平に明日山へゆく、今夜山へ行った人たちを呼んで振舞酒を出す、と告げる。夜、振舞酒の席上、「短気の照やん」たちが山へ行く作法を仁義のように教示する。「お山へ行く作法は必ず守ってもらいやしょう 一つ、お山へ行ったら物を云わぬこと」「一つ、山から帰る時は必ずうしろをふり向かぬこと」等。照やんは帰り際に辰平を外に連れだし小声で「おい、嫌ならお山まで行かんでも、七谷の所から帰ってもいいのだぞ」と言う。(p. 74, 1.13-p. 79, 1.9; 5頁)

14. 夜更け、銭屋の又やんの泣き声が聞こえる。又やんは榎山まいりの倅の背板から荒縄を食い切って逃げ出したのだ。おりんは又やんを諭す。(p. 79, 1.10-p. 81, 1.15; 2 頁半)

15. その次の夜、おりんは辰平を励まして榎山まいりの途につき、辰平の背板にのる。風はないが寒い。玉やん、根っこに手をかけて暗闇の中を目をすえて見送る。辰平とおりんの榎山行きがていねいに描写される。四つ目の山をのぼると、榎山が見える。七谷を通り越し、榎山の頂をめざす。頂上に着くと、あちらこちらに死骸がある。おびえる辰平を、おりんが手を前へ前へと振って進ませる。死骸のない岩かげのところで、おりん、背板から降ろせと辰平の肩をたたき、足をバタバタさせる。(p. 81, 1.16-p. 86, 1.1; 4 頁)

16. おりんの顔には死人の相が現れている。おりんは今来た方へ辰平を向かせると、堅く手を握った後、その背中をどんと押す。辰平、涙を流し、よろよろと山を下りて行く。すると、雪が降り出す。そのことを一言だけ伝えようと、辰平、再び山にのぼる。雪をかぶったおりん、白狐のように一点を見つめながら念仏を称えている。「おっかあ、雪が降ってきたよう」3 回声をかける。おりんは静かに手を出して帰れ帰れと振る。辰平、脱兎のように山をくだる。(p. 86, 1.2-p. 88, 1.17; 3 頁)

17. 七谷の上におりたとき、銭屋の倅が又やんを谷に落とそうとしているのが目にはいる。又やんが倅の襟を必死につかむのを、倅、父親の腹を蹴って突き落とす。谷底から竜巻のように、からすの大群が舞い上がる。(p. 88, 1.17-p. 90, 1.14; 2 頁)

18. 辰平、村に戻る。家の中では、次男が末の子に「蟹の歌」を歌っている。「這って来たとして戸で入れぬ 蟹は夜泣くとりじゃない」昔、捨てられた老婆が這って戻ってきたが、家の者は「蟹のようだ」と云って戸を締めて中へ入れなかった、老婆が一晩中泣いているのを、子どもが「蟹が泣いている」と云った、と解釈される。けさ吉はおりんの綿入れを背中にかけて酒を飲んでいる。辰平、「綿入れの歌」を思う。「なんぼ寒いとって綿入れを 山へ行くにゃ着せられぬ」(p. 90, 1.15-p. 92, 1.17; 2 頁)

#### 作品構成

訳者ベルナル・フランクの言う音楽的な構成という視点に立って、この作品を4つの部分に分ける。カッコ内に、「梗概」に示した1から18までの番号と、各部分の総頁数を記す。

##### I. (1~4, 6 頁半) 提示 1

場所(信州)。人物(おりんとその家族)。時間(6月から榎山祭りまで)。70歳になると榎山まいりをする掟。辰平の再婚の可能性。

##### II. (5~9, 10 頁半) 提示 2

おりんは榎山まいりの準備をほぼ終えた。丈夫な歯を欠くことと、辰平の嫁を迎えることだけがのこっている。村の構成。けさ吉の結婚話。祭りの日、玉やん(辰平の後妻)が来る。おりん、歯を欠く。

## III. (10～14, 32頁) 展開

榎山祭りが終わり、秋から冬に向かう。女が2人入り、おりんはひまになる。雨屋に対する制裁（「榎山さんに謝る」）。おりんの榎山まいりと雨屋の根絶やしの話題。榎山まいりの儀式。おりんと又やんの対照。

## IV. (15～18, 11頁) フィナーレ

辰平とおりんの榎山まいり。頂上で、辰平、おりんをおろす。別れ。雪が降る。又やんは俵に谷へ突き落とされる。辰平、村に戻る。

新潮文庫版総頁59頁のうち、前半I, IIが約17頁、全体の4分の1強、後半III, IVが約43頁、全体の4分の3弱を占める。前半は、「榎山節」の考察という擬似論文的な文体によって多く状況が示される部分で、内容的にはここで後半の準備が行なわれる。後半は物語がリアルに叙述される部分が主となり、「榎山節」考察が従となる。

## (5) 翻訳の問題

## a) ポティエの「翻訳」図式

ベルナール・ポティエはその著書『一般言語学—理論と記述—』<sup>6)</sup>の冒頭において、言語によるコミュニケーションを論じる中で翻訳の問題を取り上げている。

「言語によるコミュニケーション」は次のように図示される<sup>7)</sup>。(図1)

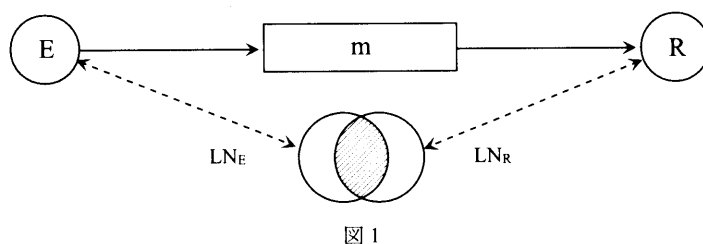


図1

送り手Eは無限の言及対象（刺激）を概念化Coする（その概念化に自然言語LNは関わるだろう）。概念化された刺激は自然言語にコード化され、メッセージmとなる（言表行為）。そのメッセージは受け手Rにとっての刺激となり、受け手は自分の自然言語のコードに照らしてこれを概念化する（理解）。

それに対して、「翻訳のメカニズム」は次のように図示される<sup>8)</sup>。(図2)

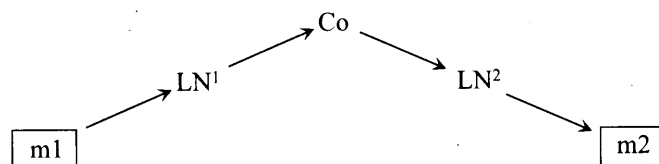


図2

ここでは、同一人が受け手でもあり、送り手でもある。m1 が第一の刺激となり（理解）、次にそれは m2 として送り出される（言表行為）。

ポティエの論は、翻訳についてもいろいろ考えさせてくれる。

言語によるコミュニケーションでは、一つのメッセージがかならずしも同一の仕方で伝達されるのではなく、その概念化にあたって用いられた言語が何であったかが忘れられることさえある。翻訳においては、メッセージはかならず2つであり、同一の概念化が目標される。

「言語によるコミュニケーション」(A)と「翻訳のメカニズム」(B)のちがいを考えてみる。

- 1) A においては、言表行為から理解へ、m は創造的に作り上げられる。
- 2) B においては、理解から言表行為へ、きわめて意識的な行動となる。m が2つあることはつねに意識されている。A においては、m は意識されないことさえある。
- 3) 逆に、B においては、概念化に対する意識が低くなる可能性がある。

A においては、送り手は概念が受け手に伝わるように、受け手は送り手の概念を理解するように、最大のエネルギーが使われる。

B においては、概念はすでに出来上がっている。

#### b) 日本語原文＝フランス語翻訳対照研究について

この対照研究の方法を考えるために、一例としてまず、東京日仏学館フランス語通信教育講座「上級和文仏訳」におけるアヌイ神父 R. P. Anouilh による出題および参考訳 (No. 389, 1970年2月12日) を検討する。アヌイ先生はいつも、「文字通りの訳」*traduction littérale* と「自由訳」*traduction libre* を示された。

(テキスト)

<sup>1</sup>端的に云って、いつも小遣に不自由した。<sup>2</sup>したがって郷里の家から臨時の送金を求める必要があった。<sup>3</sup>そのたびごとに私は田舎の家兄に宛て、嘘でもなし本当でもないことを理由にして送金を促す手紙を書いた。<sup>4</sup>これには文章の上で苦勞した。<sup>5</sup>まるで嘘八百のことを理由にしてはすぐばれるし、馬鹿な真似をしたと本当のことを書いたら兄貴が腹を立てるにきまっている。<sup>6</sup>お袋なら子供に騙されるように出来ているかも知れないが、兄貴は必ずしもそうではない。

井伏鱒二『無心状』より

#### *Traduction littérale*

<sup>1</sup>Pour parler franchement j'étais toujours à court d'argent. <sup>2</sup>C'est pourquoi j'étais obligé de demander à ma maison du pays natal l'envoi de certaines sommes supplémentaires. <sup>3</sup>J'écrivais chaque fois à mon frère aîné et alléguant des raisons ni fausses ni vraies je le priais instamment de m'envoyer de l'argent. <sup>4</sup>La rédaction de ces lettres présentait des difficultés. <sup>5</sup>Si les raisons que je donnais n'étaient que mensonge sur mensonge l'astuce serait tout de suite découverte, mais si je disais la vérité en parlant de mes bêtises, j'étais sûr que mon frère serait furieux. <sup>6</sup>Il est possible qu'une mère soit d'une nature crédule quand il s'agit de son enfant, mais on ne peut pas dire la même chose d'un frère aîné.



*Traduction libre*

<sup>1</sup>A parler franc je manquais d'argent de poche, <sup>2</sup>ce qui m'obligeait à demander à la maison l'envoi de fonds supplémentaire. <sup>3</sup>J'écrivais au pays à mon frère aîné et appuyais ma requête sur des explications évasives. <sup>4</sup>La difficulté gisait dans le style. <sup>5</sup>Un tissu de mensonges serait vite découvert et l'aveu de mes bêtises ne pouvait que m'attirer le courroux. <sup>6</sup>Un frère n'est pas comme une mère toujours si facile à tromper.

ぐうたらな生活を送っていた学生時代の思い出が語られている。作者は小遣が不足して、しばしば実家のきびしい兄に送金を頼む。

テキストは6つの文から成り(文頭に番号を付す), それぞれ次の内容をもつ。

1. いつも小遣に不自由した。
2. 送金を求める必要があった。
3. 送金を促す手紙を書いた。
4. 文章の上で苦勞した。
5. 4の理由(なぜ苦勞したか)
6. 5に関して。兄のきびしさ, お袋の甘さ。

1から4までは, 事実関係の叙述であり, 文末表現は「～した」等のタ型。「端的に云って」「したがって」「必要があった」「送金を促す」「文章の上で」等, 硬い表現が多用される。5, 6は4の内容の展開部であり, 文末表現は「～する」等のル型にかわる。表現も一転してくだけたものとなる。「まるで嘘八百のことを」「すぐばれる」「馬鹿な真似をした」「腹を立てる」「子供に騙(だま)されるように出来ている」

硬い表現とくだけた表現の対照が, とぼけた味わいを作り出している。

フランス語訳の方を見ると, 「文字通りの訳」では, 原文と同じく6文であり, 文字通り逐語的な訳となっている。原文の文の運びが尊重されている。「自由訳」は5文(1, 2を1文に)で, フランス語として読める表現に変えられている。「文字通り訳」における toujours 「いつも」, c'est pourquoi 「したがって」, chaque fois 「そのたびごとに」は省かれ, 5の si 「もし～なら」という接続詞のついた2つの節はすっきりした単文に変えられている。

しかし, いずれの訳においても, 硬い表現とくだけた表現の対照は表現されていない。

フランス語訳においては, 日本語原文と異なり, 1から5までの半過去を基盤とする叙述と, 6の一般的な記述(「母親というものはだれでも～」)との対比が明確にあらわれてしまっている。

## (6) フランス語訳『榎山節考』検討

訳者ベルナール・フランクの言うこの作品がもつ音楽性について, 日本語原文とフランス語訳との対照によって, ここでは次の2つの視点から文体を分析する。

## a) 擬似論文的な「榎山節」考察

語り手によるこの考察は全編にわたって回帰的に繰り広げられ, 社会の掟の不条理, ぶき

みさが端的に、ユーモアをたたえて、同一のテンポで示される。文章表現の上では、頻出する文末表現「～のである」が基調のリズムを作っている。

b) 完結したおりんの物語

梗概におけるⅠ～Ⅳの交響曲的構成は、Ⅰ、Ⅱにおける提示、再提示、Ⅲ、Ⅳにおける展開、大詰めから成る。また夏（Ⅰ、Ⅱ）と冬（Ⅲ、Ⅳ）、それぞれの季節の風景の対称・移り行き、さらに前半（Ⅰ、Ⅱ）の静に対する後半（Ⅲ、Ⅳ）の動、また動きの緩急等、によって構成される。

以下、作品中から7箇所を取り上げて具体的に検討する。（原文→（日）、訳文→（フ）と略記。）

1) 冒頭。物語の場所と人物が説明される。

<sup>1</sup>山と山が連っていて、どこまでも山ばかりである。<sup>2</sup>この信州の山々の間にある村一向う村のはずれにおりんの家はあった。<sup>3</sup>家の前に大きい樫けやきの根の切株があって、切口が板のように平たいので子供達や通る人達が腰をかけては重宝がっていた。<sup>4</sup>だから村の人はおりんの家のことを「根っこ」と呼んでいた。<sup>5</sup>嫁に来たのは五十年前のことだった。<sup>6</sup>この村ではおりんの実家の村を向う村と呼んでいた。<sup>7</sup>村には名がないので両方で向う村と呼びあっていたのである。<sup>8</sup>向う村と云っても山一つ越えた所だった。<sup>9</sup>おりんは今年六十九だが亭主は二十年前に死んで、一人息子の辰平の嫁は去年栗拾いに行った時、谷底へ転げ落ちて死んでしまった。<sup>10</sup>後に残された四人の孫の面倒を見るより寡夫になった辰平の後妻を探すことの方が頭が痛いことだった。<sup>11</sup>村にも向う村にも恰好の後家などなかったからである<sup>9)</sup>。

<sup>1</sup>Aux montagnes succèdent les montagnes. Où qu'on aille, ce ne sont rien que montagnes. <sup>2</sup>Au milieu de toutes ces montagnes du Shinshū<sup>10)</sup> à la lisière d'un village, *Mukô-mura*, « le village d'en face », était la maison d'O Rin. <sup>3</sup>Devant la maison, il y avait la souche coupée d'un gros *keyaki*<sup>11)</sup>. Comme la surface en était aussi lisse qu'une planche, les enfants et les passants s'y asseyaient : on le tenait pour un grand trésor. <sup>4</sup>A cause de cela, les gens du village appelaient la maison d'O Rin, « la Souche ». <sup>5</sup>O Rin était venue là comme bru, cela faisait plus de cinquante ans.

<sup>6</sup>Dans ce village-ci, on appelait le village où se trouvait la maison natale d'O Rin, « le village d'en face ». <sup>7</sup>Comme les villages n'ont pas de nom, on s'appelait à l'unisson, des deux côtés, « le village d'en face ». <sup>8</sup>Quoiqu'on dit « village d'en face », il y avait une montagne à passer pour y parvenir. <sup>9</sup>O Rin avait eu cette année-là ses soixante-neuf, mais son mari était mort il y avait déjà plus de vingt ans. La femme de Tappei, son fils unique, en allant au ramassage des marrons, l'année passée, avait roulé au fond d'un ravin et s'était tuée. <sup>10</sup>Plus que de s'occuper des quatre petits-enfants qui restaient, chercher une seconde femme pour Tappei devenu veuf lui était une cause de mal de tête. <sup>11</sup>C'est que, ni dans le village, ni au village d'en face, il n'y avait une veuve qui convint. <sup>12)</sup>

物語の舞台、人物、状況を客観的に説明した出だしである。1, 3, 9は、それぞれ（日）の1文に対して（フ）2文。（日）は、接続助詞が2つの文をつなぐ（「連っていて、どこま

でも、「切株があつて、切口が」「前に死んで、一人息子の」。(フ)は5と6の間に段落を設けている。8「向う村と云つても山一つ越えた所だった」は少しとぼけた表現だが、フランス語では説明的に *pour y parvenir* を加えて、「そこに行くには山を一つ越えなければならない」としている。しかし、目立つちがいはそれくらいで、驚くほどに、原文の表現を文字通りに追った訳となっている。

## 2)「榎山節」解釈。

<sup>1</sup>塩屋のおとりさん運がよい

山へ行く日にゃ雪が降る

<sup>2</sup>村では山へ行くという言葉に二つの全く違った意味があるのであった。<sup>3</sup>どちらも同じ発音で同じアクセントだが、誰でもどの方の意味だかを知りわけることが出来るのである。<sup>4</sup>仕事で山へ登って薪とりや炭焼きなどに行くことが山へ行くのであって、もう一つの意味は榎山へ行くという意味なのである。<sup>5</sup>榎山へ行く日に雪が降ればその人は運がよい人であると云い伝えられていた。<sup>6</sup>塩屋にはおとりさんという人はいないのであるが、何代か前には実在した人であつて、その人が山へ行く日に雪が降つたということは運がよい人であるという代表人物で、歌になつて伝えられているのである。<sup>7</sup>この村では雪など珍しいものではなかつた。<sup>8</sup>冬になれば村にもときどき雪が降り、山の頂は冬は雪で白くなつてはいるのだが、おとりさんという人は榎山へ到着したときに雪が降り出したのである。<sup>9</sup>雪の中を行くのだつたら運の悪いことであるが、おとりさんの場合は理想的だったのである。<sup>10</sup>そしてこの歌はもつと別の意味をも含んでいたのである。<sup>11</sup>それは榎山へ行くには夏は行かないでなるべく冬行くように暗示を与えているのであつた。<sup>12</sup>だから榎山まわりに行く人は雪の降りそうな時を選んで行つたのである。<sup>13</sup>雪が降り積れば行けない山であつた。<sup>14</sup>神の住んでいる榎山は七つの谷と三つの池を越えて行く遠い所にある山であつた。<sup>15</sup>雪のない道を行つて到着した時に雪が降らなければ、運がよいとは云われないのである。<sup>16</sup>この歌は雪の降る前に行けという、かなり限られた時の指定もしているのである<sup>13)</sup>。

<sup>1</sup>*O Tori-san de la Maison au sel sa chance est bonne*

*Le jour qu'elle va à la montagne il neige*

<sup>2</sup>Dans le village, l'expression « aller à la montagne » a deux sens complètement différents. <sup>3</sup>Dans les deux cas, c'est la même prononciation, c'est le même accent, mais tout le monde peut distinguer duquel des deux sens il s'agit. <sup>4</sup>En parlant du travail, monter dans la montagne pour aller chercher du bois à brûler ou pour faire du charbon de bois, c'est aller à la montagne ; mais l'autre sens, c'est le sens d'aller à Narayama. <sup>5</sup>C'était une tradition de dire que si, le jour où l'on va à Narayama, il neige, on est quelqu'un dont la chance est bonne. <sup>6</sup>A la Maison au sel, il n'y avait personne du nom d'O Tori-san, mais c'était quelqu'un qui, je ne sais combien de générations avant, avait vraiment existé et, du fait que le jour où elle était allée à Narayama il avait neigé, elle avait été mise en chanson et elle était restée dans la légende comme le personnage typique de quelqu'un dont la chance est bonne. <sup>7</sup>Dans ce village, la neige n'était pas une chose rare. <sup>8</sup>Quand venait l'hiver, il neigeait de temps en temps dans le village même et le sommet des montagnes, à l'hiver, devenait blanc de neige ; mais en ce qui concerne la personne appelée O Tori-san, ce qu'il y avait, est que la neige était tombée au moment où elle était arrivée à Narayama. <sup>9</sup>Si l'on va sous la neige, c'est que la chance est mauvaise, mais dans le cas d'O Tori-san, ç'avait été idéal. <sup>10</sup>Aussi cette chanson contenait-elle, en plus, un autre sens : <sup>11</sup>elle donnait à entendre que, quand on va à la montagne, on n'y va pas l'été, et qu'il faut dans toute la mesure du possible y aller l'hiver. <sup>12</sup>Et c'est pourquoi les gens qui allaient au

pèlerinage de Narayama choisissaient pour s'y rendre un temps où il semble devoir neiger. <sup>13</sup>C'était une montagne où, si la neige s'accumule, on ne peut aller. <sup>14</sup>Narayama, où habite un dieu, était une montagne située en un lieu éloigné, que l'on gagne en passant sept vallées et trois étangs. <sup>15</sup>Que si, après avoir parcouru un chemin sans neige, la neige ne tombe pas lorsque vous êtes arrivé, on ne peut pas dire que votre chance est bonne. <sup>16</sup>Cette chanson prescrit donc aussi des délais assez limités, c'est-à-dire : Va avant que la neige ne tombe. <sup>14)</sup>

この小説の中にたえずあらわれる「檜山節」を説明する部分の典型的なものである。(日)「～のである(～のであった)」という文末表現が目立つ。1の「檜山節」を除く15コの文のうち、「～のである」が9コ(3, 4, 6, 8, 9, 10, 12, 15, 16), 「～のであった」が2コ(2, 11)あり, 後者の夕型は〈提示〉を, 前者のル型は内容の説明を担っている。これらの文末表現がここでは論をもっともらしく, またいかがわしく見せる役を果たしている。

6は日本文としても坐りの悪い文で, こうした坐りの悪さはそのままフランス語には移しづらいようだ。(フ)をさらに(日)に反訳すると, 「彼女が檜山に行った日に雪が降ったという事実から, 彼女は歌に歌われるようになり, 運がよい人の典型として伝説となった。」となる。

### 3) おりんが火打ち石で自分の歯を叩く。

<sup>1</sup>おりんは誰も見ていないのを見ますと火打ち石を握った。<sup>2</sup>口を開いて上下の前歯を火打ち石でガッガッと叩いた。<sup>3</sup>丈夫な歯を叩いてこわそうとするのだった。<sup>4</sup>ガッガッと脳天に響いて嫌な痛さである。<sup>5</sup>だが我慢してつづけて叩けばいつかは歯が欠けるだろうと思った。<sup>6</sup>欠けるのが楽しみにもなっていたので, 此の頃は叩いた痛さも気持がよいぐらいにさえ思えるのだった。

<sup>7</sup>おりんは年をとっても歯が達者であった。<sup>8</sup>若い時から歯が自慢で, とうもろこしの乾したのでもバリバリ噛み砕いて食べられるぐらいの良い歯だった。<sup>9</sup>年をとっても一本も抜けなかったので, これはおりんに恥ずかしいことになってしまったのである。<sup>10</sup>息子の辰平の方はかなり欠けてしまったのに, おりんのぎっしり揃っている歯はいかにも食うことには退けをとらないようであり, 何んでも食べられるというように思われるので, 食料の乏しいこの村では恥ずかしいことであった<sup>15)</sup>。

<sup>1</sup>O Rin, après s'être assurée que personne ne regardait, saisit la pierre à feu. <sup>2</sup>Ouvrant la bouche, elle tapa sur ses dents de devant en haut et en bas avec la pierre à feu, *gat gat*. <sup>3</sup>Elle pensait ainsi casser ses solides dents. <sup>4</sup>C'était une sale douleur qui résonnait *gan, gan*, jusque sous le crâne. <sup>5</sup>Mais elle se disait que, si elle avait la patience de continuer à frapper, un de ces jours, des dents lui manqueraient. <sup>6</sup>L'idée de ce manque finissait par lui être une joie. Aussi, ces derniers temps, en arrivait-elle à ressentir la douleur du choc elle-même comme une sensation de bien-être.

<sup>7</sup>Les dents d'O Rin étaient, malgré la vieillesse, en pleine santé. <sup>8</sup>Depuis son jeune âge, ses dents avaient été sa fierté. C'étaient des dents bonnes au point qu'elles pouvaient croquer jusqu'à du maïs séché. <sup>9</sup>Même en vieillissant, il ne lui en était pas tombé une seule et, pour O Rin, c'avait fini par être une cause de honte. <sup>10</sup>Alors que Tappei, son fils, en avait déjà perdu un bon nombre, les dents d'O Rin, qui s'alignaient au complet, pouvaient donner à penser que, pour ce qui est de manger, elle était vraiment imbattable et qu'elle pouvait dévorer n'importe quoi. Et dans ce village qui manquait de nourriture, c'est une chose qui faisait honte.<sup>16)</sup>

物語の登場人物の行動・状況が描かれる個所であり, ここでは擬似論文的な「檜山節」の

解説にみられるもっともらしき、うさんくささの臭みがすっかり消え、おりんの動き、感情、身体的状況がリアルに、すきなく表現されている。

ここでも、原文の表現はていねいに、文字通りに、フランス語に移されており、2、4では擬音語「ガッガッ」「ガンガン」は、そのまま音を示している。しかし、それに対して、8の擬態語「バリバリ噛み砕いて」、10のそれ「ぎっしり揃っている歯」はそれぞれ、croquer, s'aligner au complet と、客観的な表現に変えられている。

#### 4) 辰平の後妻として玉やんがおりんの家へ来る。

<sup>1</sup>昼頃、家の前の根っこに、向うをむいて腰をかけている女があった。<sup>2</sup>そばにはふくらんだ信玄袋を置いて誰かを待っているらしい様子である。

<sup>3</sup>おりんはさつきからあそこにいる女は向う村から来た嫁じゃアないか？ とも思ったが、それなら家の中へ入ってきそうなものだと思ったので、まさかそれが嫁だとは気がつかなかった。<sup>4</sup>祭りなので向う村からどこかの家へ来た客だとも思われるように休んでいる風であった。<sup>5</sup>だが、ふくらんだ信玄袋はやっぱり普通の客ではないと気になったのでおりんはたまりかねて出ていった。

「<sup>6</sup>どこのひとだか知らんがお祭りに来たのけえ？」

<sup>7</sup>女は慣れなれしい口のきき方で

「辰平やんのうちはここずら」

<sup>8</sup>おりんはやっぱり嫁だと思った。

「<sup>9</sup>あんたは向う村から来たずら、玉やんじゃねえけ？」

<sup>10</sup>ええ、そうでよ、うちの方もお祭りだけんど、こっちへきてお祭りをするようにつて、みんなが云うもんだけん、今日きやした」

<sup>11</sup>おりんは玉やんの袖をひっぱりながら

「そうけえ、さあさあ早く入らんけえ」

<sup>12</sup>おりんは天にのぼったように走りまわってお膳を持ち出して祭りの御馳走を並べた。

「<sup>13</sup>さあ食べておくれ、いま辰平をむかえに行ってくるから」

<sup>14</sup>そう云うと玉やんは

「うちの方のごっそうを食うより、こっちへ来て食った方がいいとみんなが云うもんだから、今朝めし前に来たでよ」

「<sup>15</sup>さあさあ食べねえよ、えんりよなんいらんから」

<sup>16</sup>そんなことを云わなくても昨日来るかと思っていたのだから、朝めしなんぞ食って来たからと云ってもよいものを、こっちの方では食って来たと云ってもすぐめしを出すものと思った。

<sup>17</sup>玉やんは食べながら話し始めた。

「おばあやんがいい人だから、早く行け、早く行けとみんなが云うもんだから」

<sup>18</sup>うまそうに食べている玉やんを、おりんはうれしそうに眺めていた。

「<sup>19</sup>こないだ来たのがわしの兄貴でねえ、おばあやんはいい人だと云うもんだから、わしも早く来てえと思ってねえ」

<sup>20</sup>おりんは玉やんの方へすり寄った。<sup>21</sup>この嫁は正直だから。<sup>22</sup>おせじじゃねえと思った。

「<sup>23</sup>まっと早く来りゃいいに、昨日来るかと思っていたに」

<sup>24</sup>そう云ってまたのり出したが、あんまりそばに行つて達者の歯を見られると気がついたので、手で口を押えてあごをひっこめた<sup>17)</sup>。

<sup>1</sup>Aux environs de midi, O Rin s'aperçut qu'il y avait sur la souche de devant la maison une femme assise, qui regardait de l'autre côté. <sup>2</sup>Elle avait posé à côté d'elle son sac de voyage gonflé et elle avait l'air d'attendre quelqu'un.

<sup>3</sup>O Rin se demanda dès le début si la femme qui était là n'était pas la bru qui devait venir du village d'en face. « Mais, si c'était le cas, elle aurait l'air de vouloir entrer dans la maison », se disait O Rin, qui n'arrivait pas à être tout à fait sûre que ce fût la bru. <sup>4</sup>Cette femme semblait être en train de se reposer, de façon telle qu'on aurait pu la prendre aussi bien pour une visiteuse, venue du village d'en face voir quelque famille à l'occasion de la fête. <sup>5</sup>Mais, vu son sac de voyage gonflé, quand même, ce n'était pas une visiteuse ordinaire. O Rin, intriguée, n'en pouvant plus, sortit.

—<sup>6</sup>D'où que vous êtes donc? Seriez-vous point venue pour la fête?

<sup>7</sup>La femme, avec une façon de demander familière :

—La Maison de Tappei-yan est-ce que ce serait point ici?

« Il n'y a pas de doute, c'est bien la bru », pensa O Rin.

—<sup>9</sup>Vous, vous êtes-t-y point venue du village d'en face? Vous seriez-t-y point Tama-yan?

—<sup>10</sup>Hé oui, c'est ça même! Chez nous aussi, c'est la fête, mais du moment que je viens ici, faut arriver pour la fête, que tout le monde a dit. Aussi, je suis venue aujourd'hui.

<sup>11</sup>O Rin, tout en tirant Tama-yan par la manche :

—Hé, c'est-y vrai! Allons, allons, n'entrez-vous pas?

<sup>12</sup>O Rin, comme transportée au ciel, courut partout, apporta la table et étala les plats du bon repas de fête.

—<sup>13</sup>Allons, mangez! Maintenant, je vais aller chercher Tappei.

<sup>14</sup>A ces mots, Tama-yan :

—Plutôt que d'manger le bon repas à la maison, c'est mieux d'manger quand je serai arrivée ici, que tout le monde a dit. Aussi, ce matin, je suis venue avant mon déjeuner.

—<sup>15</sup>Allons, allons, mangez donc. Y a point besoin de faire des manières.

<sup>16</sup>Même que Tama-yan n'aurait point dit ça, comme O Rin avait pensé qu'elle viendrait peut-être hier, ça n'aurait rien fait qu'elle dise qu'elle avait mangé son déjeuner avant de venir. Ici, même qu'elle aurait eu mangé avant, O Rin lui aurait tout de suite servi le repas.

<sup>17</sup>Tama-yan, tout en mangeant, commença à parler :

—Vu que la Bonne-Maman est quelqu'un de gentil, vas-y vite, vas-y vite, que tout le monde a dit ...

<sup>18</sup>O Rin regardait avec un air heureux Tama-yan qui mangeait avec un air d'apprécier.

—<sup>19</sup>Celui qu'est venu l'autre jour, c'est mon frère. La Bonne-Maman est quelqu'un de gentil, qu'il a dit. C'est pourquoi, moi aussi, je veux y aller vite, j'ai pensé.

<sup>20</sup>O Rin se glissa jusqu'à côté de Tama-yan. «<sup>21</sup>Cette bru-là est bien honnête. <sup>22</sup>C'est point des belles paroles », se dit-elle.

—<sup>23</sup>Vous auriez dû venir plus tôt. J'avais pensé que vous seriez là hier.

<sup>24</sup>Ce disant, elle s'avança encore, mais elle s'avisa qu'en allant trop près, ses robustes dents allaient se faire voir. Elle porta la main à sa bouche et rentra le menton.<sup>18)</sup>

おりんが待ちに待った、辰平の後妻玉やんとはじめて出会う場面。時は檀山祭りの日の昼さがり。姑と嫁の喜び、不安が饒舌な対話にみごとに表現されている。

3～5, 16はいずれもおりんの、一方は期待と不安の、他方は有頂天の、心の動きをよくあらわして、原文は、はっきりしない、不安定な文となっている。(フ)は原文の素朴さをできるだけ忠実に移そうとしているが、その不安定さをどうしてもそのままは訳出できないようだ。16をみると、「そんなことを云わなくても」Même que Tama-yan n'aurait point dit ça, 「昨日来るかと思っていたのだから」comme O Rin avait pensé qu'elle viendrait peut-être hier, 「朝め

しなぞ食って来たからと云ってもよいものを」*ça n'aurait rien fait qu'elle dise qu'elle avait mangé son déjeuner avant de venir*. まではほぼ文字通りに訳し、「こっちの方では食って来たと云ってもすぐめしを出すものと思った。」*Ici, même qu'elle aurait eu mangé avant, O Rin lui aurait tout de suite servi le repas.* (=こちらでは、前に食べたとしても、すぐに食事を出したろうに。)は少し変えている。

文字通りには訳出されないものに、表現的な語もある。5「たまりかねて」、7「慣れなれしい」、11「袖をひっぱりながら」、18「うまそうに」、20「すり寄った」、24「のり出した／ひっこめた」。

### 5) 雨屋に対する集団の暴力。

<sup>1</sup>強風が一日中吹いて、夜も夜どおし吹きまくった夜明け、不意に、あの奇妙な叫び声があった。

<sup>2</sup>「檀山さんに謝るぞ！」

<sup>3</sup>そう叫びながら村の人達が方々で騒ぎ出した、おりんはその声をきくと蒲団の中からすばやく這い出して、転がるように表に出た。<sup>4</sup>年はとっていても棒を掴んだ。<sup>5</sup>横から玉やんが末の子を背中にしばりつけるようにおぶって出て来た。<sup>6</sup>もう手に太い棒を握っていた。

<sup>7</sup>おりんは

「どこだ？」

と叫んだ。

<sup>8</sup>玉やんは物を云うひまもないというように返事もしないで真っ青になって馳けて行った。<sup>9</sup>もう家中の者がみんな飛び出してしまった後であった。

<sup>10</sup>盗人は雨屋の亭主であった。<sup>11</sup>隣りの焼松の家に忍びこんで豆のかますを盗み出したところを、焼松の家中の者に袋だたきにされたのであった。

<sup>12</sup>食料を盗むことは村では極悪人であった。<sup>13</sup>最も重い制裁である「檀山さんに謝る」ということをされるのである。<sup>14</sup>その家の食料を奪い取って、みんなで分け合ってしまう制裁である。<sup>15</sup>分配を貰う人は必ず喧嘩支度で馳けつければ貰うことが出来ないのである。<sup>16</sup>若し賊が抵抗していれば戦わなければならないので一刻も早く馳けつけることになっていた。<sup>17</sup>戦うつもりで早く馳けつけるのであるから必ず<sup>はだし</sup>跣で行くことになっていたのである。<sup>18</sup>履き物をはいて行けばその人もまた袋叩きにされることになっていて、馳けつける方でも死にもの狂いである。<sup>19</sup>これは食料を奪いとられるということが、どれだけ重大な事であるかが誰も神経にきざみつけられているからである<sup>19)</sup>。

<sup>1</sup>Le lendemain d'un jour où un vent fort avait soufflé toute la journée et tourbillonné d'un bout à l'autre de la nuit, à l'aube, il s'éleva, soudain, une voix poussant ce cri étrange :

—<sup>2</sup>Amende honorable à Messire Narayama!

<sup>3</sup>A ce cri, les gens du village de commencer à faire ici et là du chahut. O Rin, en entendant la voix, se glissa promptement hors de l'édredon et, comme dans une culbute, sortit devant la maison. <sup>4</sup>Toute vieille qu'elle fût, elle saisit un bâton. <sup>5</sup>Par le côté, Tama-yan, portant la plus jeune enfant ficelée sur son dos n'importe comment, sortit. <sup>6</sup>Il ne s'écoula guère de temps qu'elle n'eût saisi un bâton.

<sup>7</sup>O Rin de crier :

—Où c'est?

<sup>8</sup>Tama-yan, comme si elle n'avait pas eu le temps de dire quoi que ce soir, pâlit sans répondre et se mit à courir.

<sup>9</sup>Tout le monde dans la maison avait déjà bondi au-dehors.

<sup>10</sup>Le voleur était le patron de la Maison qu'y pleut. <sup>11</sup>Il s'était introduit secrètement dans la maison voisine, le Pin calciné, et comme il commençait à y voler des sacs de pois, il avait reçu une raclée de la part des gens du Pin calciné.

<sup>12</sup>Voler de la nourriture, c'était, dans le village, le fait de l'homme le plus infâme. <sup>13</sup>Celui-ci doit subir ce qu'on appelle « l'ammende honorable à Messire Narayama » qui est la sanction la plus lourde qui soit. <sup>14</sup>C'est une sanction qui consiste à prendre de force la nourriture de la maison du coupable et à la partager entre tout le monde. <sup>15</sup>S'ils omettent de faire sans faute leurs préparatifs de bagarre et de courir, ceux qui s'en vont chercher une part ne pourront rien recevoir. <sup>16</sup>Comme, au cas où le voleur fait de la résistance, il arrive qu'on doive se battre, on se précipite le plus tôt possible. <sup>17</sup>Du fait qu'on se précipite le plus tôt possible, on va nécessairement pieds nus. <sup>18</sup>L'homme qui irait chaussé serait, lui aussi, l'objet d'une raclée, si bien que même pour ceux qui font la galopade, il s'agit d'une lutte éperdue. <sup>19</sup>C'est que jusqu'à quel point la confiscation de la nourriture est une grande affaire, est imprimé dans les nerfs de chacun. <sup>20</sup>

冬を迎え、飢えの危機が迫る。この文の前半（1～9）は、物語の緊迫した状況を的確に叙述している。1「強風が一日中吹いて、夜も夜どおし吹きまくった夜明け、不意に、あの奇妙な叫び声があった。」が、表現的な言い回し、ぶきみな「あの」を含めて、できるかぎり忠実に訳出されている。

後半（12～19）は「榎山さんに謝る」の擬似論文的説明で、例によって文末表現「～のである」が頻出する。

#### 6) 雨屋の根絶やし／おりんの榎山まいり／子を捨てる話題—石臼の音。

(……) <sup>1</sup>錢屋の俵が帰ったあと、みんな黙ってしまった。<sup>2</sup>村の人達が殺気だっている様子では今夜あたりから雨屋の誰かが一人ずつ減ってゆくじゃあないかと思うと、何んとなく身がひきしまってしまった。<sup>3</sup>玉やんのひく石臼の音までが妙にごろごろと鳴っていた。

<sup>4</sup>寝ころんでいた辰平が突然云った。

「おばあやん、来年は山へ行くかなあ」

<sup>5</sup>おりんはそれをきくとほっとした。<sup>6</sup>辰平はやっとその気になってくれたのだと安心したのである。

<sup>7</sup>おりんはすぐ云った。

「<sup>8</sup>向う村のわしのおばあやんも山へ行ったのだぞ、このうちのお姑も山へ行ったのだぞ、わしだって行かなきゃア」

<sup>9</sup>玉やんが石臼をひくのを止めて

「いいよ、ねずみっ子が生れたら、わしが裏山の谷へ行って捨てるから、おばあやんはかやの木のうちみたように歌にやらんから、大丈夫だよ」

<sup>10</sup>そう云うとけさ吉が負けん気で

「コバカー、俺が捨ちやっくらア、わきゃアねえ」

<sup>11</sup>わきゃアねえということは、何んでもないという意味である。

<sup>12</sup>そして松やんに向って

「なあ、俺が捨ちやると云ったなあ」

と云うと松やんが

「ああ、ふんとに、たのんだぞ」



<sup>13</sup>みんなが同時に松やんの大きい腹のあたりに目をやった。

<sup>14</sup>玉やんの石臼の音がごろごろと鳴って、遠くで雷が鳴ってるように響いていた<sup>21)</sup>。

(...) <sup>1</sup>Après que le fils de la Maison au sou s'en fut retourné, tout le monde se tut. <sup>2</sup>Les gens du village semblant être d'humeur à tuer, il était bien possible qu'à partir de ce soir, les individus de la Maison qu'y pleut disparussent l'un après l'autre. A y penser, on se sentait un peu rétracté. <sup>3</sup>Jusqu'au mortier de pierre que faisait tourner Tamayan, qui émettait son bruit de moulinet d'une façon bizarre...

<sup>4</sup>Tappei, allongé par terre, dit soudain :

— Bonne-Maman, l'année prochaine, tu vas à la montagne, hein?

<sup>5</sup>O Rin, en l'entendant, poussa un soupir de soulagement. <sup>6</sup>Tappei était enfin dans ces dispositions d'esprit-là! Elle se sentit rassurée.

<sup>7</sup>Elle répondit aussitôt :

— <sup>8</sup>Ma grand-mère, au village d'en face, est allée à la montagne. La belle-mère de cette maison-ci, elle aussi, est allée à la montagne. Moi, à mon tour, je dois! ...

<sup>9</sup>Tama-yan, arrêtant de tourner le mortier de pierre :

— C'est point du tout la peine. Quand le souriceau naîtra, moi, j'irai le jeter dans un ravin, à la montagne de derrière, et Bonne-Maman ne sera point chansonnée comme c'est arrivé à la Maison du *Kaya no ki*. Alors, faut pas se tourmenter!

<sup>10</sup>Sur ce, Kesakichi, crânement :

— Imbéciles que vous êtes! c'est moi qui irai le jeter! Y a pas à s'encombrer de raisons!

<sup>11</sup>Y a pas à s'encombrer de raisons, c'est-à-dire : ça n'est pas difficile.

<sup>12</sup>Puis, se tournant vers Matsu-yan, il ajouta :

— Hein? On a dit que c'est moi qui irai le jeter!

Alors, Matsu-yan :

— Hah! Vraiment, je le lui demande!

<sup>13</sup>Tout le monde dirigea les yeux en même temps sur le gros ventre de Matsu-yan.

<sup>14</sup>Le mortier de pierre de Tama-yan émettait son bruit de moulinet. Il résonnait comme un orage qui gronde au loin.<sup>22)</sup>

雨屋一家が根絶やしにされる可能性、おりんの榎山行き、それに生れてくる赤子の間引きという、3つの犠牲が、石臼の音を基調音として、おりんの家族の心に重くのしかかっている。1～3における文末表現「～してしまった」のくりかえし（「みんな黙ってしまった」「身がひきしまってしまった」）、「～てゆくじゃアないかと思う」という口語的な表現が、恐るべき犠牲と日常的な口語性のぶきみなアンバランスをあらわしている。(フ)の方は忠実に訳されているが、このアンバランスの面はあらわされていない。

12「ああ、ふんとに、たのんだぞ」の後半は、直訳すれば *je te le demande* であろうが、フランス語の会話状況では、それでは、松やんがけさ吉にだけ話しかけていることになってしまうのであろう。

7) 辰平とおりんの榎山まいりの大詰め。榎山の頂上に着く。おりんの崇高な姿の叙述。

<sup>1</sup>おりんは箆の上ですっくと立った。<sup>2</sup>両手を握って胸にあてて、両手の肘を左右に開いて、じっと

下を見つめていた。<sup>3</sup>口を結んで不動の形である。<sup>4</sup>帯の代りに縄をしめていた。<sup>5</sup>辰平は身動きもしないでいるおりんの顔を眺めた。<sup>6</sup>おりんの顔は家にいるときは違った顔つきになっているのに気がついた。

<sup>7</sup>その顔には死人の相が現れていたのである。

<sup>8</sup>おりんは手を延して辰平の手を握った。<sup>9</sup>そして辰平の身体を今来た方に向かせた。<sup>10</sup>辰平は身体中が熱くなって湯の中に入っているようにあぶら汗でびっしょりだった。<sup>11</sup>頭の上からは湯気が立っていた。

<sup>12</sup>おりんの手は辰平の手を堅く握りしめた。<sup>13</sup>それから辰平の背をどーんと押した。

<sup>14</sup>辰平は歩み出したのである。<sup>15</sup>うしろを振り向いてはならない山の誓いに従って歩き出したのである。

<sup>16</sup>十歩ばかり行って辰平はおりんの乗っていないうしろの背板を天に突き出して大粒の涙をぼろぼろと落した。<sup>17</sup>酔っぱらいのようによろよろと下って行った。<sup>18</sup>少し下って行って辰平は死骸につまずいて転んだ。<sup>19</sup>その横の死人の、もう肉も落ちて灰色の骨がのぞいている顔のところの手をついてしまった。<sup>20</sup>起きようとしてその死人の顔を見ると細い首に縄が巻きつけてあるのを見たのだった。<sup>21</sup>それを見ると辰平は首をうなだれた。「<sup>22</sup>俺にはそんな勇氣はない」とつぶやいた。<sup>23</sup>そして又、山を下って行った。<sup>24</sup>檜山の中程まで降りて来た時だった。<sup>25</sup>辰平の目の前に白いものが映ったのである。<sup>26</sup>立止まって目の前を見つめた。<sup>27</sup>檜の木の上に白い粉が舞っているのだ。

<sup>28</sup>雪だった。<sup>29</sup>辰平は

「あっ！」

と声を上げた。<sup>30</sup>そして雪を見つめた。<sup>31</sup>雪は乱れて濃くなって降ってきた。<sup>32</sup>ふだんおりんが、「わしが山へ行く時アきつと雪が降るぞ」と力んでいたその通りになったのである。<sup>33</sup>辰平は猛然と足を返して山を登り出した。<sup>34</sup>山の掙ひきまてを守らなければならない誓いも吹きとんでしまったのである。<sup>35</sup>雪が降ってきたことをおりんに知らせようとしたのである。<sup>36</sup>知らせようというより雪が降って来た！と話し合いたかったのである。<sup>37</sup>本当に雪が降ったなあ！と、せめて一言だけ云いたかったのである。<sup>38</sup>辰平はましろのように禁断の山道を登って行った。

<sup>39</sup>おりんのいる岩のところまで行った時には雪は地面をすっかり白くかくしていた。<sup>40</sup>岩のかげにかくれておりんの様子を窺った。<sup>41</sup>お山まいるの誓いを破って後をふり向いたばかりでなく、こんなところまで引き返してしまい、物を云ってはならない誓いまで破ろうとするのである。<sup>42</sup>罪悪を犯しているのと同じことである。<sup>43</sup>だが「きつと雪が降るぞ」と云った通りに雪が降ってきたのだ。<sup>44</sup>これだけは一言でいいから云いたかった。

<sup>45</sup>辰平はそっと岩かげから顔を出した。<sup>46</sup>そこには目の前におりんが坐っていた。<sup>47</sup>背から頭に箆を負うようにして雪を防いでいるが、前髪にも、胸にも、膝にも雪が積っていて、白狐のように一点を見つめながら念仏を称えていた。<sup>48</sup>辰平は大きな声で

「おっかあ、雪が降ってきたよう」

<sup>49</sup>おりんは静かに手を出して辰平の方に振った。<sup>50</sup>それは帰れ帰れと云っているようである。

「<sup>51</sup>おっかあ、寒いだろうなあ」

<sup>52</sup>おりんは頭を何回も横に振った。<sup>53</sup>その時、辰平はあたりからすが一ぴきもなくなっているのに気がついた。<sup>54</sup>雪が降ってきたから里の方へでも飛んで行ったか、巢の中にも入ってしまったのだらうと思った。<sup>55</sup>雪が降ってきてよかった。<sup>56</sup>それに寒い山の風に吹かれているより雪の中に閉ざされている方が寒くないかも知れない、そしてこのまま、おっかあは眠ってしまうのだらうと思った。

「<sup>57</sup>おっかあ、雪が降って運がいいなあ」

<sup>58</sup>そのあとから

「山へ行く日に」

と歌の文句をつけ加えた。

<sup>59</sup>おりんは頭を上下に動かして頷きながら、辰平の声のする方に手を出して帰れ帰れと振った。<sup>60</sup>辰平は

「おっかあ、ふんとに雪が降ったなア」

と叫び終ると脱兎のように駆けて山を降った。<sup>61</sup>山の掟を破ったことを誰かにしられやアしないかと飛び通して山を降った。<sup>23)</sup>

<sup>1</sup>O Rin se plaça debout toute droite sur la natte. <sup>2</sup>Elle ferma les deux mains et les tint appuyées contre sa poitrine, gardant ses deux coudes bien écartés à gauche et à droite de son corps, et le regard obstinément fixé au sol. <sup>3</sup>La bouche close, elle formait une figure immobile. <sup>4</sup>En guise de ceinture, elle s'était noué une corde. <sup>5</sup>Tappei contempla le visage de cette O Rin dont le corps ne faisait pas le moindre mouvement. <sup>6</sup>Il eut le sentiment que le visage d'O Rin avait pris une autre expression qu'au temps où elle était à la maison. <sup>7</sup>Sur son visage, les traits d'une morte avaient fait leur apparition.

<sup>8</sup>O Rin étendit les mains et saisit les mains de Tappei. <sup>9</sup>Puis, elle le fit se tourner dans la direction d'où ils étaient venus. <sup>10</sup>Tout le corps de Tappei devint brûlant ; comme s'il était entré dans un bain d'eau chaude, de grosses gouttes de sueur lui perlèrent. <sup>11</sup>Une vapeur se dégagea de sa tête.

<sup>12</sup>Les mains d'O Rin serrèrent dur les mains de Tappei. <sup>13</sup>Puis, elle lui poussa fortement le dos.

<sup>14</sup>Tappei se mit à marcher. <sup>15</sup>Il se mit en marche en respectant le serment de cette montagne dans laquelle il est défendu de se retourner en arrière.

<sup>16</sup>Après avoir marché dix pas, Tappei brandit vers le ciel la planche où O Rin n'était pas assise et se mit à pleurer à chaudes larmes. <sup>17</sup>Comme un homme ivre, il redescendit en trébuchant. <sup>18</sup>Après un peu de descente, il buta contre un cadavre et dégringola. <sup>19</sup>Il alla donner de la main, à côté de ce cadavre, en plein contre une figure où, dans un vide laissé par de la chair tombée, apparaissait de l'os de couleur grise. <sup>20</sup>Comme il allait se relever, il regarda la figure de ce cadavre et il s'aperçut qu'une corde était enroulée autour de son mince cou. <sup>21</sup>Tappei, à cette vue, baissa la tête. <sup>22</sup>«Moi j'aurais jamais eu un pareil courage », grommela-t-il. <sup>23</sup>Il recommença sa descente de la montagne. <sup>24</sup>Il était redescendu à peu près jusqu'à la moitié de Narayama, <sup>25</sup>quand quelque chose de blanc se refléchit dans ses yeux. <sup>26</sup>Il s'arrêta et regarda devant lui. <sup>27</sup>Au milieu des chênes, il dansait une poudre blanche. <sup>28</sup>C'était de la neige.

—<sup>29</sup>Ah!

Tappei eut une exclamation. <sup>30</sup>Il regarda avidement la neige. <sup>31</sup>La neige se mit à tourbillonner et à tomber plus épaisse. <sup>32</sup>C'était donc arrivé ainsi qu'O Rin l'avait toujours fièrement annoncé :

« Quand j'irai à la montagne, moi, c'est bien probable qu'il neigera! »

<sup>33</sup>Tappei tourna résolument les talons et commença à remonter la montagne. <sup>34</sup>Le serment de respecter sans faute les lois de la montagne s'en alla au vent. <sup>35</sup>Tappei voulait annoncer à O Rin que la neige s'était mise à tomber. <sup>36</sup>Plutôt que de lui annoncer cela, il voulait en parler avec elle : « La neige s'est mise à tomber! <sup>37</sup>Vraiment, la neige tombe! » Il ne voulait lui dire que cette seule parole. <sup>38</sup>Tappei grimpa comme un singe le chemin de la montagne défendue.

<sup>39</sup>Lorsqu'il parvint au rocher où se trouvait O Rin, la neige avait entièrement recouvert le sol d'une couche blanche. <sup>40</sup>Dissimulé au pied d'un rocher, il examina la contenance d'O Rin. <sup>41</sup>Non content d'avoir, en retournant sur ses pas, rompu le serment du pèlerinage de la montagne, il se préparait à rompre le serment selon lequel on ne doit pas prononcer un mot. <sup>42</sup>C'était la même chose que de commettre un crime. <sup>43</sup>Mais, tout comme elle l'avait dit : « C'est bien probable qu'il neigera! », voilà qu'il s'était mis à neiger! <sup>44</sup>C'est cela qu'il voulait dire — il suffisait d'une parole.

<sup>45</sup>Tappei avança doucement la figure de derrière le rocher. <sup>46</sup>Là, devant ses yeux, O Rin était assise. <sup>47</sup>Elle s'était protégée de la neige en se couvrant la tête par derrière avec la natte, mais, sur ses cheveux de devant, sur sa poitrine et sur ses genoux, la neige s'était accumulée : elle avait l'air d'un renard blanc. Les yeux fixés sur un point, elle psalmodiait la prière d'adoration du Bouddha.<sup>24)</sup> <sup>48</sup>Tappei, d'une voix forte :

—Maman ... Y neige!

<sup>49</sup>O Rin sortit doucement une main et l'agita du côté de Tappei. <sup>50</sup>Cela semblait vouloir dire : « Rentre! rentre! »

—<sup>51</sup>Maman, tu vas avoir froid!

<sup>52</sup>O Rin secoua plusieurs fois la tête de côté. <sup>53</sup>A ce moment-là, Tappei s'aperçut qu'il n'y avait plus un seul corbeau. <sup>54</sup>Comme il s'était mis à neiger, peut-être s'étaient-ils envolés vers des villages. Ou alors, peut-être ont-ils regagné leur nid, se dit-il. <sup>55</sup>Quelle bonne chose, qu'il eût neigé! <sup>56</sup>Et puis, on devait avoir moins froid, à être enfermé dans la neige, qu'à être exposé au vent de la montagne froide. Et, pensa-t-il, comme ça, Maman finira par s'endormir.

—<sup>57</sup>Maman, y neige, ta chance est bonne!

<sup>58</sup>Il continua en disant les paroles de la chanson :

*Le jour qu'elle va à la montagne ...*

<sup>59</sup>Tout en marquant son assentiment par des mouvements de tête de bas en haut, O Rin avançait la main du côté d'où venait la voix de Tappei et l'agitait, pour dire : « Rentre! rentre! »

—<sup>60</sup>Maman, c'est vrai qu'y neige! cria-t-il et, sur ce, comme un lièvre échappé, il dévala la montagne en courant.

<sup>61</sup>A l'idée que quelqu'un savait peut-être qu'il avait enfreint les règles de la montagne, il fit la descente par bonds.<sup>25)</sup>

物語のクライマックスの部分。例外的に短い文をつらねて、おりんの崇高な生を力強く叙述している。

無駄のない、精密な描写の中で色彩的な表現、擬態語など、表現的な語が重要な役割を果たしていることがわかる。1「おりんは箆の上にすつくと立った」、2「じつと下を見つめていた」、10「あぶら汗でびっしょりだった」、13「辰平の背をどーんと押した」、16「大粒の涙をぼろぼろと落した」、17「酔っぱらいのようによろよると」、34「誓いも吹きとんでしまったのである」等。

14、15の、口語体「あるきだした」に対する文語体「あゆみだした」の際立たせに加えての、くりかえされる文末表現「～のである」(「辰平は歩み出したのである」「～歩き出したのである」)、また34から37まで4回くりかえされる「～のである」に注目してみよう。「～のだ、～のである」は、基本的には作者(話し手)と読者(聞き手)との間の垣根を取り払う仕掛けのような役割を果たすものとされるが、<sup>26)</sup> 物語の叙述であるこれらの部分ではそれは、擬似論文的説明に頻出する同じ文末表現を逆手にとったように用いられている。

## まとめ

日本語原文とフランス語訳文との間に差があるところに、それぞれの言語の構造の、あるいは表現の一般的な特徴をみることができる。日本語における文末表現、擬態語、助詞の重要性。フランス語における時間表現、節構成の固定性。文語と口語についての、両言語表現者の対し方の相違。日本語表現者の大きな自由。

深沢七郎は日本人をだけでなく、日本語の特性をもまた端的に提示して見せてくれたように思われる。ベルナール・フランクは尊敬する作家のテキストからできるかぎり離れないように、しかも熟読に耐えるフランス語をつくる離れ業を成し遂げた。

## 註

- 1) 本論は、愛知大学言語学談話会公開講座「言語」における発表(1997年6月7日)に加筆・訂正を施したものである。
- 2) 拙論「日本語とフランス語——「動き」のとらえ方を比較する」(1982)、「井伏鱒二『黒い雨』の一節をめぐる——フランス語訳との対照」(1987)(いずれも、拙著『ことばを歩く——フランス語との出会い』所収)
- 3) とくにシャルル・アグノエル Charles Haguenauer を生涯の師とした。
- 4) シャルル・ペロー Charles Perrault の物語では、樵の夫婦は飢えに苦しみ七人の子どもを森に捨てるが、いじめられっ子の末っ子親指小僧の機転により子どもたちは難を逃れる。
- 5) 浄土教の理論的基礎を築いた源信(942-1017)による。
- 6) Bernard POTTIER, *Linguistique générale—théorie et description—*, Klincksieck, 1974; 三宅徳嘉・南館英孝訳、岩波書店、1984。
- 7) 三宅・南館訳書, p. 3.
- 8) 同書, p. 4.
- 9) 日本語原文(以下、日と略記), p. 34.
- 10) (訳註) Province montagneuse du centre du Japon.
- 11) (訳註) Sortie d'arbre de l'espèce des ormes.
- 12) フランス語訳書(以下、フと略記), pp. 19-20.
- 13) 日, pp. 39-40.
- 14) フ, pp. 32-34.
- 15) 日, pp. 40-41.
- 16) フ, pp. 35-36.
- 17) 日, pp. 51-52.
- 18) フ, pp. 57-61.
- 19) 日, pp. 64-65.
- 20) フ, pp. 84-87.
- 21) 日, pp. 70-71.
- 22) フ, pp. 99-101.
- 23) 日, pp. 86-88.
- 24) (訳註) *Nembutsu*. C'est la formule « Adoration au Bouddha Amida » (*Namu Amida butsu*) que répètent les fidèles des doctrines de la Terre pure. Le lecteur désireux de s'informer sur ce point, pourra consulter l'excellente monographie consacrée par le P. de Lubac à *Amida* (Editions du Seuil).
- 25) フ, pp. 132-138.
- 26) 尾上圭介「日本語を歩く」(1997年5月18日朝日新聞)には、次のようにある。  
「もう行ってもええやろか」「まだあかん」と言われると、ビシヤッと拒絶されたような気になるが、「まだあかんねん」と言われると、むこうの事情をやわらかく説明されたというような気持ちになる。[……]

たしかに「ネン」をつけると当たりがやわらかくなるのだが、これはどうしてだろうか。実は、「ネン」ということばは、もともと自分と相手の間にある扉を開いて、こちらの手の内を相手に見せるという姿勢を持っているのである。

「ネン」は「ノヤ」の音に変化した形で、共通語で例えば「ずっと待っていたのだ」というときの「ノダ」と同じく、自分だけが知っていることを相手に説明する言い方である。